

芸豪烈伝その26 まつうら・しろわか
松浦四郎若
 生まれ変わったら今度は六歳から
 浪曲を始めたい



写真・森 幸一ほか 文・おさだ衛



まつうら・しろわか 本名・寺坂 東。昭和20年10月5日、愛媛県西宇和郡うまれ。大阪で紳士服仕立ての店に就職するも、幼少の頃から好きだった浪曲が忘れられず昭和45年、25歳で松浦四郎に入門。松浦四郎若の芸名で翌年、初舞台で『秋田藩』を読む。昭和49年、大阪市の公衆座で昇進披露。十八番は『子宝二百石』『太閤記』『伊達騒動』ほか。堺市在住。51歳。「べっぴんの女房ですよ」の妻と一男一女。好きな言葉は「お先どうぞ」。

若さ、躍動感、気迫。松浦四郎若の浪曲には現代の息吹が感じられる。舞台は名刀の切れ味の爽快感があり、人の世の哀歓をわきまえた義理と人情の世界が展開する。次代の関西浪曲界を背負って立つ若手の最右翼だ。

「たしかに若手ですが、この場を借りて私の生まれ年を訂正します。昭和25年うまれを昭和20年にしてください。デビューの時に、周りの関係者に若いのに越したことはないといわれて5歳も若くしてました。その5年分の私の人生を返してくださいよ。はははは」



昭和50年、第3回NHK新人浪曲コンクールで最優秀賞を獲得。受賞パーティを開く（大阪・天王寺 都ホテル）。右が恩師の松浦四郎。左は四郎の妻で名曲師の松浦有岐子。昭和53年没、65歳。「有岐子師匠の稽古はきつかったですが、とてもありがたかった。女房は有岐子師匠の姪です」

明朗で快活。会う人の心を包み込む優しさにじみでて、話を聞いているこちらにも元気がなってくる。

「浪曲は贅沢なひとり芸です。作曲や演出が自由にできて内容も硬軟自在で好き放題に演れますからね。上演時間も伸縮自在ですしね」

師匠の松浦四郎（現在は名古屋在住、91歳）については「細かいことは言わず急所だけを締める師匠でした。責任感が強くて人を疑わない道筋一本の方でした」と、師匠の性格はそのまま弟子に受け継がれたようだ。

四郎若は一年中、浪曲だけを考えている。「昨夜『シンドラのリスト』という映画を見ていましたね。感動しました。映画を見ながら、これを浪曲化したいと思いました」

ユダヤ人の悲劇の浪曲化とは柔軟な発想で素晴らしい。いつか本当に舞台にかけてほしいものだ。

浪曲の将来については、「けっして悲観はしていませんよ。いまは充電時期ですよ」

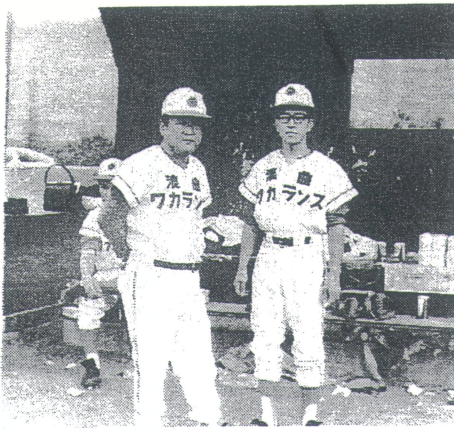
現在、不安材料はないのだろうか。「それは、たくさんあります。上演場所、曲師不足、演題など山積してます」

上演場所については、

「大阪にも新弟子が入門しているのに定席が一心寺シアターだけでは寂しい限りです。上演場所をどんどん広げないといけません。大阪人気質は引ッ込

み思案なんです。自己PRに積極性がない。カッコつけなんです。私自身ももつと表に出ていかないと」。演題は、「今は一席30分で収めないと、お客さんが飽きてしまう。ポピュラーな話なら15分で出来ますが演じるのは物語です。それからねえ。ジレンマがあります。それに放送禁止用語の問題です。テレビでは事前に台本の提出を求められます。なにか浪曲が目の敵にされている気がします。単なる言葉狩りに終始してはいけません。『吃又』などが放映されずに埋もれていくのは、さまざまな意味で良くありません」

曲師不足は、
「給料の保証さえすれば、若い人はカ



昭和44年、京山幸枝若が野球部を作った。チーム名は浪曲ワカラン。背番号は浪曲の登場人物で右の四郎若の背中には野狐三次、左の幸枝若は会津の小鉄と書いてある。「初戦は寿司屋さんチームで、大差をつけられ二ギリつぶされました」

ンが良くリズム感があるから三味線は出来ると思います。演者がその給料をしつかり稼がなありませんな」
打てば響く。浪曲に關してなら瞬時に的確な答えが返ってくるのだ。

趣味は「畑を借りて耕しているんです。仕事の仕事なので太陽に当たりたいんですよ。ほとんどの野菜を作っていますよ。今度は、銭の花が咲く木を植えようかと思っています。はははは」

十年後は、

「家賃が溜まらなければいいですよ。私は長屋住まいに憧れているんです」

いわゆる三道楽は、

「まず飲めません。次に生まれ変わっ



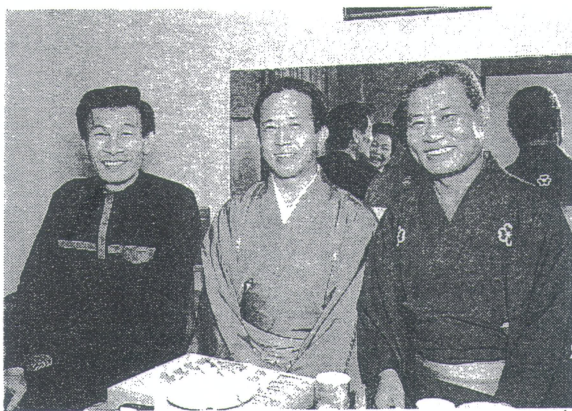
平成5年、大阪の国立文楽劇場にて。「水戸黄門出世旅」の扮装で。左から四郎若、京山幸若、黄門さまの廣澤駒蔵、京山宗若。「毎年、浪曲ミュージカルという試みをしています。新しいことをして、すこしでもお客さんを増やしたい」

たら一升酒をぐいぐい飲みたい。打つはたまにパチンコぐらい。それと買えません。品行方正です。もって生まれた性格なんです。浪曲だけなんです」

しんから浪曲が好きなんです。ね。

「生まれ変わったら、今度は六つか七歳から浪曲をやりたいですよ。生涯を懸ける値打ちがありますよ。明日ポコンとあの世にいつても浪曲をやっていたことで、後悔はありません」

この熱血漢の情熱が浪曲を再び不死鳥のように蘇らせる原動力になる、と実感させられた2時間だった。四郎若の今後の熱い行動に注目したい。



東京は浅草「木馬亭」の楽屋にて。左から春日井梅光、四郎若、玉川福太郎。浪曲復興を旗頭にする若衆頭の面々だ。

浪曲…これほどすばらしい芸は他にはないと思います。

29
52

浪曲家の皆さん…頑張ってください。

多くのファンを楽しませて下さい。

葛飾区・坂本豊吉